

2017年度 大学院奨励研究員研究報告書

研究科委員長印

印

2018年3月25日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏名	中野歩美	印
----	------	---

指導教員

所属・職名	社会学部・教授	
氏名	関根康正	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	北西インド・タール砂漠地域に暮らすジョーギーの生活実践と自己創造に関する民族誌的研究
採用期間	2017年 4月 1日 ~ 2018年 3月 31日

研究科受付印

教務機構受付印

提出先： 教務機構事務部

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	中野歩美	論文題目	北インドにおける婚資婚再考—ラージャスターン州西部に暮らすジョーギーの姻戚関係を事例に—		
	雑誌名	国立民族学博物館研究報告		巻号	発行年月	掲載頁
				42巻3号	2018年3月	271-320

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名	中野歩美	論文題目	放浪民ジョーギーの定住化と呪術性の現在		
	書名	ストリート人類学	発行年月	頁		
			2018年2月	総頁：768 担当箇所：329-339		

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	日本文化人類学会近畿地区研究懇談会 2017年度修士論文・博士論文発表会	開催地	大阪大学人間科学部・人間科学研究科本館
題目	北西インド・タール砂漠地域に暮らすジョーギーの生活実践と自己創造に関する民族誌的研究	発表年月日	2018年3月18日

学会名	2017年度南アジア学会修論博論発表会	開催地	神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ
題目	北西インド・タール砂漠地域に暮らすジョーギーの生活実践と自己創造に関する民族誌的研究	発表年月日	2018年4月8日

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（3000字程度）

本学大学院奨励研究員に採用された2017年度の研究経過状況として、一本の学術論文、一本の共著、そして博士論文を研究成果として結実させたことがあげられる。そこで以下に、それぞれの成果についての概要を提示することとしたい。

（１）「北インドにおける婚資婚再考ーラージャスターン州西部に暮らすジョーギーの姻戚関係を事例に一」

本稿は、『国立民族学博物館研究報告』42巻3号に掲載された学術論文である。本稿では、ブラーマンの価値体系のなかで周縁化されてきた北インドにおける婚資婚をジョーギーの婚姻実践から再考することを試みた。現在の北インドにおいては、花嫁を見返りを求めずに嫁に出すことを至高の婚姻形式とするというブラーマンの理念にもとづいた持参財婚が主流となっている。そうした視座からは、娘の父親が婚資を受け取る婚資婚という婚姻形式は商業取引として非難の対象となってきた。また、そのような視座にもとづいた見解は、研究者のあいだでも少なからず内面化されてきたきらいがある。それを踏まえ本稿では、ジョーギーの人びとの婚約交渉やその後の婚資の実践に注目し、いかに姻戚間の動態的な関係が生成されていくのかを検討する。そこで明らかとなるのは、サンバルと呼ばれる婚資の実践が単なる反対贈与のための場ではなく、当事者の親同士が適切な姻戚としての振る舞いをおこなうことで信頼関係を構築する場になっているという点である。結婚後には非対称な姻戚関係は、一切の義務を負わない対等な関係へと移行する。こうしたジョーギーたちの姻戚関係の構築方法は、互酬性の否定によって自己を上位に他者を下位に位置づけることで自らの価値を高めようとする〈序列化の論理〉とは異なる論理にもとづいている。本稿ではそれを、一時的な非対称性を作り出すことで互酬性を誘発し、その反対贈与の実践を通じて信頼にもとづいた新たな均衡関係を生成する〈均衡化の論理〉として提示した。

（２）「放浪民ジョーギーの定住化と呪術性の現在」

本稿は、関根康正編『ストリート人類学』の第10章として掲載された論考である。本稿では、北西インドにおいて放浪民として知られてきたジョーギーたちに対して付与されてきた宗教性や呪術性が、「定住後」の世界において、ジョーギーと顔の見える関係性を持つようになった村の人びとやジョーギー自身によって、どのようなものとして見なされ取り扱われているのかを検討した。そこでは、ジョーギーたちがそうした「伝統的」生業行為が、自分たちにとって慣習的である種の特権的な実践であると同時に、現在では公表が憚られるような、恥ずかしい非科学的な実践でもあるという両義的認識を持っていることが明らかになった。しかしその一方で、村の人びとが今でもジョーギーのところに頻繁に毒抜きや虫取りのお願いに来ることで、ジョーギーへの否定的言説を覆していること様子も観察された。ここから、近代的科学的言説空間に包摂・支配される状況下で、ジョーギーが引き継いできた「伝統的」な生業は、呪術的な性格が引き剥がされ脱埋め込み化されつつも、逆説的に彼らが定住の文脈に適應する形で実践されるブリコラージュを通じて、現代の生活世界の文脈に再埋め込み化されているといえる。

（３）「北西インド・タール砂漠地域に暮らすジョーギーの生活実践と自己創造に関する民族誌的研究」

本稿は、関西学院大学大学院社会学研究科に提出された博士学位申請論文であり、博士課程後期課程における研究の集大成といえる論考である。本論文は、北西インド・ラージャスターン州の西部に広がるタール砂漠地域に暮らす人びとのあいだで、「移動民」ないしは「物乞いカースト」として知られるジョーギーを対象に、彼らの生活実践から立ち上がる内在的な自己認識の動態を明らかにする試みである。博士論文は、序章、本論（第一章から第六章）、結章の全八章から成る。序章では、既存の先行研究の問題点として、（１）

(上位) カースト範疇中心的な視座の限界、(2) 移動／定住二元論に立脚した議論の限界の二点が指摘される。両者に共通するのは、どちらも中心・周縁という非対称な二元論的範疇構造を有し、現地の支配的な言説空間を形成しているという点である。そこで本論では、ジョーギーの人びとの視点に寄り添いながら、実際に彼らによって生きられる世界の記述を目指す。その視座は、M. ハイデガーの建築論に触発されたT. インゴルドの提唱する「住まう視点」と共鳴するものである。

第一章では、英国植民地期の国勢調査や民族誌調査の報告書をもとに、ジョーギーの人びとがいかに「カースト」として範疇化され、客体化されていったのかを検証する。特筆すべき点は、同じナート派という宗教セクトの信者によって構成されるジョーギーとカールペリヤーが、範疇化の過程で、前者はOBC（その他の後進階級）、後者はSC（指定カースト）という政治的カテゴリーへと分岐し、現在では集団範疇と集団表象の両方において断絶した存在として見なされていることである。以上の議論を踏まえたうえで、第二章から第五章においては、現実世界を生きるジョーギーたちのいわば「下から」の生活実践と自己認識について、現地調査にもとづくデータから検討を加えることとなる。そこでは、現地のジョーギーたちが、(1) 表面的には「定住」的な生活様式を取り入れながらも、実際には「移動」か「定住」かという二元論では捉えきれないような住まい方をしていること、(2) ナート派信仰と親族ネットワークを盾に、「下から」のわれわれという自己認識に支えられながら「定住後」の世界を生き抜いていることが示される。続く第六章では、前章までに明らかにされた「下から」の自己認識を生のはり所とするジョーギーたちが、2000年代に入り議論が活発化している新たな「上から」の範疇化や、それに関連する現地のNGOの活動をどのように受け止め、対応しているのかについて考察する。結章では、ここまでの議論を総括したうえで、ジョーギーたちが植民地期以来の「上から」の範疇化に翻弄されながらも、単なる声を持たない被抑圧者として描き出されるような存在ではなく、「下から」の自己認識に支えられた肯定的な生を全うするための文化的仕掛けを持っていることが論じられる。

以上、本年度はこれまでの研究の成果として、いくつかの論考を完成させ、それぞれが投稿論文や共著の一章として公刊された。また、これまでのインドでのフィールドワークで収集されたデータをもとに分析・考察を加えた研究の集大成として博士論文を書き上げ、審査を経て博士号の取得という成果として結実させることができたことは、博士課程後期課程における最大の成果としてあげられる。

以上